

二〇一九年度

(二月二日)

適性型入学試験

適性Ⅰ(作文型)

試験にあたって

- 一 開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 二 問題は全部で三ページにわたって印刷してあります。最初に枚数を確認してください。
- 三 解答用紙は一枚で、問題用紙と違う用紙に印刷されており、問題用紙の中にはさんであります。
- 四 試験時間は四十五分間です。終了五分前になったら知らせます。
- 五 最初に受験番号と氏名を解答用紙の決められたらんに記入してください。
- 六 声を出して読んだり、他の人と筆記用具などの貸し借りをしてはいけません。
- 七 適性Ⅰの解答に当たっては、すべて解答用紙に縦書きで記入してください。
- 八 答案を書き終わっても座席からはなれないでください。
- 九 終了の合図後、係が解答用紙を集めます。

適性Ⅰの問題は、次のページから始まります。

次の文章を読み、問いに答えなさい。

人と人との（つながり）の問題を考える最初の出发点として、人は本当に一人では生きられないのか、それとも、まあそれなりに生きていけるのかといった問いを立ててみましょう。

かつての日本には「ムラ社会」という言葉でよく表現されるような地域共同体が存在していました。「ご近所の人の顔と名前はぜんぶわかる」といった集落がそれですね。これは、何も地方の農村や漁村だけに限ったことでなく、東京のような都会にだってあったのです。『ALWAYS 三丁目の夕日』——映画ですから描き方にはフィクションの要素も多分に入っているとはいえ——のように、近所に住む住人同士の関係が非常に濃密な「ご町内」が、昭和四〇年くらいまでの日本には確かにありました。

そんな「ムラ社会」が、確固として存在した昔であれば、これは明らかに「一人では生きていけない」ということは厳然とした事実でした。

なにより、食料や衣類をはじめ、生活に必要な物資を調達するためにも、仕事に就くにしても、いろいろな人たちの手を借りなければいけなかったからです。こうした、物理的に一人では生活できない時代は長く続きました。だから村の交際から締め出されてしまう「村八分」というペナルティは、わりと最近まで死活問題だったわけです。

ところが近代社会になってきて、貨幣（＝お金）というものが、より生活を媒介する手段として浸透していき、極端な話お金さえあれば、生きるために必要なサービスはだいたい享受できるようになりました。

とりわけ、今はコンビニなど二十四時間営業の店も増え、思い立った時にいつでも生活必需品は手に入られるし、ネットショッピングと宅配を使えば、部屋から一步も出ずにあらゆるサービスを受けることも可能になっています。働くにしても、仕事の種類によってはメールとファックスで全部済んでしまう場合だってあります。

このように、一人で生きていても昔のように困ることはありません。生き方としては、「誰とも付き合わず、一人で生きる」ことも選択可能なのです。

ある意味で、「人は一人では生きていけない」というこれまでの前提がもはや成立しない状況は現実には生

じているといえるのです。

さて、こうした現代的状況を目の前にして私が言いたいのは、「だから、一人でも生きていけるんだよ」ということではありません。みんなバラバラに自分の欲望のおもむくままに勝手に生きていきましようといったことでもありません。「一人でも生きていくことができてしまふ社会だから、人とつながることが昔より複雑で難しいのは当たり前だし、人とのつながりが本当の意味で大切になってきている」ということが言いたいのです。つながりの問題は、こうした観点から考え直したほうがよさそうです。

今の私たちは、お金さえあれば一人でも生きていける社会に生きています。

でも、普通の人間の直感として「そうは言っても、一人はさびしいな」という感覚がありますね。本当に世捨て人のような生活が理想だという人もいないわけではありませんが、たいてい、仮にどんなに孤独癖の強い人でも、まったくの一人ぼっちではさびしいと感ずるものです。

ではなぜ一人ではさびしいのでしょうか。やはり親しい人、心から安心できる人と交流していたい、誰かとつながりを保ちたい。そのことが、人間の幸せのひとつの大きな柱を作っているからです。だからほとんどの人が友だちがほしいし、家庭の幸せを求めているわけです。

あの人と付き合うと便利だとか便利じゃないとか、得だとか損だとかいった、そういった利得の側面で人がつながっている面もたしかにあるけれども、しかし人と人とのつながりはそれだけではないわけです。だから、「人は一人でも生きていけるか」という問いに対する私の答えは、「

」です。

(菅野 仁 『友だち幻想』より)

問一 本文中の について、ここで筆者は何と述べたと考えられるか。次の「注意」に従って書きなさい。

【注意】

- 全体を二文構成で、九〇字以上一二〇字以内で書きなさい。
- 二文目は「しかし」という書き出しにしなさい。

問二 この文章を読んであなたが考えたことを、次の「注意」と【原稿用紙の書き方】に従って書きなさい。

【注意】

- あなたの経験や考えを具体例としてあげて書きなさい。
- 適切に段落を立て、三六〇字以上四〇〇字以内で書きなさい。

【原稿用紙の書き方】

- 題名、名前は書かずに一行目から書き始めなさい。
- 書き出しや、段落をかえた時は、一マスあけなさい。
- 句読点、かぎかっこはそれぞれ一マスに書くこと。ただし、句点ととじかぎかっこ（。）は同じ一マスに書きなさい。
- 句読点が行の一番上に来てしまうときは、前の行の一番最後の字といっしょに同じマスに書きなさい。

受験番号		

氏名	

得点	*

*印のところは、何も記入しないでください。

問一 (縦書き)

120

10

20

* * *

問二 (縦書き)

400

360

300

200

100

20

10

20

* * *